



演劇的手法を授業に取り入れているのは、なぜ？

豊岡市では、コミュニケーション教育が始まり今年4年目を迎えます。コミュニケーション能力は、子どもたちの学びや生活を支える基盤です。特別な支援を必要とする子どもたちを含め、他者を理解し、人とのかかわりを通して自分の考えを持ち、人間関係形成能力・合意形成能力・発信力や創造力を育成します。では、なぜ演劇的手法を授業で取り入れているのでしょうか？

2学期に授業をしていただいた2名のプロ講師からは、そのヒントとなる言葉がありました。

劇作家：平田 オリザ 氏

○「今日の演劇ワークショップでは、話し合っ、結論出して、それを伝えなくちゃいけません。社会に出て自分の意見が通ることなんてほとんどありません。『相手が何を望んでいるかを考えること』これが最も大事です。『相手を理解しながら自分の考えを伝えること』これが折り合いをつけるということです。これからこうした折り合いをつける話し合いをぜひたくさん経験してほしいと思います。(小6の子どもたちに向けて)」

演出家：田野 邦彦 氏



○「コミュニケーション教育における大切な視点は『表現(結果)』よりも『プロセス(過程)』です。つまり、合意形成の過程、プロセスで起こっていることに着目することが重要です。演劇づくりは『合意形成の繰り返し』がその過程に表れます。『複数の他者が関わり、互いの個性や意見の違いを尊重しながら、一人一人が異なる役割を担って、ひとつのものを創り上げる。』つまり、演劇的手法を使った授業は、この合意形成の反復の中で、コミュニケーション能力や、やり遂げる力を育成するのに適しているのです。」

↑「こうやってみたら?」「いいね!」

演劇プログラムの中には、「人間関係の困難(無作為に組まれたグループでの創作)」「学習環境変化の困難(時間内に演劇を創る作業)」「相互理解への困難(他者が何を考えているのかを理解する)」「役割分担、演技方や表現などの困難(だれがどんな役割を、誰に向かって、どう演じるか)」など様々な困難さが仕込まれています。そこでは小さな失敗も生じます。このような困難さや失敗を、互いに意見を交わし、折り合いをつけ、合意しながら、子どもたちは乗り越えていきます。

豊岡市が、普段の授業の中での話し合いや対話などに加え、小6と中1で演劇的手法を授業に取り入れているのは、こうした経験をとおして、コミュニケーションの力を伸ばすためなのです。